

機関番号：32510

研究種目：基盤研究（C）

研究期間：2009～2011

課題番号：21520478

研究課題名（和文） 首都圏方言の実態に関する基礎的研究

研究課題名（英文） Fundamental Research on the Actual Status of the Tokyo Metropolitan Dialect

研究代表者

木川行央（KIGAWA YUKIO）

神田外語大学・大学院言語科学研究科・教授

研究者番号：50327186

研究成果の概要（和文）：本研究は、現代共通語の基礎となる首都圏の方言の現状をその伝統的な方言との対比の中で見ようとしたものである。今回は、神奈川県・山梨県・埼玉県そして隣接する静岡県東部において調査を実施した。その結果、共通語化・東京語化がかなり進行しているが、東京語の古層と考えられるアクセントや音声事象・文法事象が現在でも見られることを確認した。また、都内の大学に通う大学生に対するアンケート調査を実施し、青年層のことばの実態を見た。

研究成果の概要（英文）：By comparing the Tokyo metropolitan dialect, which is a basis of the modern common Japanese language, with its traditional dialects, this study attempted to examine the current status of the Tokyo metropolitan dialect. In this study, we conducted surveys in Saitama prefecture, Kanagawa prefecture, Yamanashi prefecture, and the east area of Shizuoka. As a result, we have confirmed that even today, some accents and phonological/grammatical phenomena that could be regarded as reflecting the old strata of the Tokyo dialect are observable, although the language of the speakers in the survey areas has considerably transformed itself toward the Tokyo metropolitan dialect's direction. On the basis of a questionnaire method, undergraduate students at a university in Tokyo were also surveyed to examine the actual status of the young generation's language.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2009年度	1,500,000	450,000	1,950,000
2010年度	900,000	270,000	1,170,000
2011年度	900,000	270,000	1,170,000
年度			
年度			
総計	3,300,000	990,000	4,290,000

研究分野：人文学

科研費の分科・細目：言語学、日本語学

キーワード：方言

1. 研究開始当初の背景

久野は平成16年度～平成17年度科学研究費補助金(基盤研究(C))「首都圏方言の母音の無声化とアクセントの実態に関する基礎的研究」報告書において、「東京という地

域も明確ではなく、東京方言の話し手も明確ではないが、日本語・スタンダードな日本語として受け入れられている現状があり、この状態にある人の方言を首都圏方言」と呼び、「スタンダード日本語として無邪気にと

なく受け入れられている首都圏方言は、その内容をまだ明らかにされていないまま、急速に広まっており、「このような共通語化と、その共通語を母語とする話者が増えていくという現象は、都市化する地域ではどこでも、全国で起こっていると考えられる」とした。すなわち、首都圏方言とは実際にはどのようなことばなのか、そしてその基礎をなす地域の伝統的な方言はどのようなことばで、現在の共通語あるいは東京語とどのような関係にあるのかについては、未だ不明な点が多かった。全国で共通語化・東京語化が急速に進む現在、この点についての研究は急務であった。

2. 研究の目的

1. のような状況を踏まえ、今回の研究では、この首都圏方言の伝統的方言の記述し、さらに変化の実態を見ようとした。例えば、東京周辺の地域の方言には、東京より古い型のアクセントが残るなど特徴的な点も多く、また、同じく東京周辺でも神奈川県方言と埼玉県方言には異なる特徴も見られるなど、首都圏方言は多層的な方言である。この多層性を明確にし、さらにこれらの地域でも起こっている言語変化を、ダイナミックな形で記述することは、急速な変化を起こしている現在でこそ可能な課題であり、この変化の過程を記録しておくことによって、言語変化の研究そのものに、言語環境・言語事象を軸とした提言を行うことが可能となると考える。本研究はその最初の段階として、音声事象中心に各地で調査を実施し、その結果を分析する事を目的とした。さらに、現在首都圏の大学に通う大学生の使用言語がどのようなものであるのか、現在共通語のとして使用されていることばがどのような背景を持つものであるのかについても見ることによって、首都圏方言を取り巻く様々な問題に取り組んでいきたいと考えた。

3. 研究の方法

本研究は現地における調査を中心とした。調査は、アクセント、語彙の体系的調査、アクセント・音声事象・文法事象についての多人数調査、さらに談話資料の収集といくつかの方法を組み合わせた。それによって、各地域における方言の実相に迫った。また、都内の大学に通う大学生を対象としたアンケート調査によって、現代の青年層のことばの実態を追求した。さらに文献を用いた研究、すでにある録音資料の発掘なども行った。

4. 研究成果

(1) 静岡県松崎町池代方言のアクセントは、「ゆれ」が大きいが、東京式アクセントであり、かつ東京語の古いアクセントが聞かれる。

またその「ゆれ」は、下がり目が東京語より一つ後にずれる傾向が見られる。さらに男女差も若干見られる。しかし、若年層においては、「ゆれ」が小さくなり、また東京語と同じ発音になりつつある。

(2) 神奈川県小田原市方言の音声は、基本的には東京語と同じであるが、語のアクセントでは、東京語の古い型で発音される語が見られた。また、音声現象においても東京語とは異なる発音、古い発音が聞かれた。その一方で、東京語では新しい現象とされる「原因」をゲーイン、「雰囲気」をフインキ、「体育」をタイクとする発音が老年層にも見られた。

(3) 山梨県上野原市方言のアクセントにも、東京語の古いアクセントを聞くことが出来る。また、イントネーションにおいては東京語では聞かれないイントネーションが聞かれた。

(4) 静岡県松崎町池代方言における準体法には、動詞の連体形、準体助詞「が」、準体助詞「の」があり、それぞれ用法が異なることを、談話資料を用いて明らかにした。

(5) 現代では軍隊用語あるいは階級社会的な人間集団に属する人が上位の者に向かって言う一人称代名詞「自分」は、明治期の文献では上位の者から下位の者に対して用いる場合も多く、現代のような下位から上位へという方向性は見られない。この方向性が確立していくのは日露戦争後、明治末から大正期にかけてであろうことを文献資料にもとづき明らかにした。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 24 件)

- ① 木川行央、静岡県松崎町方言のアクセントにおける「ゆれ」の実態—語アクセント調査と談話資料の観点から—、音声研究、日本音声学会、査読有、15(3)、2011、48-61
- ② 久野マリ子、首都圏方言における大学生の言語生活—挨拶表現と音声変化の例—、國學院雑誌、國學院大學、査読有、112(5)、2011、1-19

〔学会発表〕(計 2 件)

- ① 久野マリ子、首都圏に通う大学生の言語生活の動態と意識、國學院大學国語研究会後期大会、2010、國學院大學
- ② 三樹陽介、山梨県上野原市のアクセント、日本音声学会全国大会、2009、九州大学

〔図書〕（計 0 件）

〔産業財産権〕

○出願状況（計 0 件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

出願年月日：

国内外の別：

○取得状況（計 0 件）

名称：

発明者：

権利者：

種類：

番号：

取得年月日：

国内外の別：

〔その他〕

ホームページ等

6. 研究組織

(1) 研究代表者

木川行央 (KIGAWA YUKIO)

神田外語大学・大学院言語科学研究科・
教授

研究者番号：50327186

(2) 研究分担者

久野マリ子 (KUNO MARIKO)

國學院大學・文学部・教授

研究者番号：

90170018

(3) 連携研究者

()

研究者番号：